

# 所在と不在の臨界点

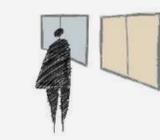
## 【帰りたい家の喪失】ー変わる私と変わらない家

家に帰ると「おかえり」と声が聞こえる。  
好きなお菓子を食べて、読みたかった本を読む。  
そんな私の家が、ずっと変わらない私の居場所であつた。  
でも時間は徐々に進み続け、私たちは今日も外に出て、誰かに出会う続ける。  
好きなものを笑われる日もあるし、人は突然裏切り、居なくなることもある。  
ふとあの愛おしさで作りあげられた家にすら帰りたくないと思うこともある。  
愛おしいモノの存在が揺らぐ度、私自身に包まれたこの家が息苦しく感じてしまう。  
帰りたい家に帰れなくなった。

## 【客体化されゆく私の家】

- (1) モノに記憶が内在する
  - (2) 家が私に成り代わっていく・私に入り込んでくるモノ
- 「私」を指す語は自分だけでなく家族やモノは広義になっていく。

【窓に映る内と外】



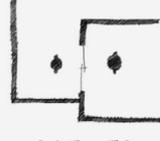
【家に続く道】



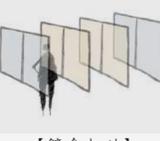
【家の中のイエ】



【家の中のマド】



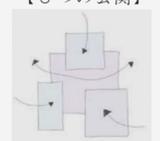
【積層風景】



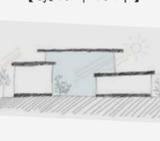
【鏡合わせ】



【5つの玄関】



【家の中の外】



## 【家に埋没しない私】ー隣人のような距離感で「私」と付き合う

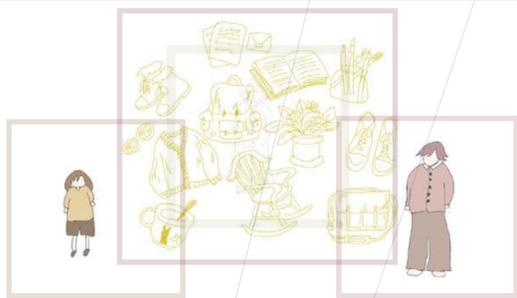
モノやヒトは愛し共にいることで、私：自身に埋没していく。  
心の喪失感とは裏腹に、存在し続けるモノを鬱陶しく感じる事がある。どうしようもなく愛おしかったものを去りたくなる日もあるにも拘らず、私：とは距離が近すぎて、離れたいのに捨て去りたくなる。嗜好や記憶など私自身を定義づけるそれは、どうやっても取り払うことはできない。だからこそ、全くの他人に対して羨み、妬み、愛し、憎むように、自分自身を受け入れるだけでなく素直に想いたい。私は私自身でありながら、私と一步距離を置いた隣人のようにありたい。昨日の自分や、私を取り巻く環境から一步身を引いて、私：自身を見守り、関わりたい。  
そうやって生きることを許してくれる家に、私は帰りたい。

## HOUSE:A 【不在の家族と暮らす家】



家族は私の存在と切り離す事ができない私の一部のようなものだ。  
だから家族のいる家に帰りたい、帰ろうと思う。  
ではその存在が揺らいだ時、私たちはそこに帰りたいと思えるだろうか。  
家族が亡くなった時、その人のモノを残すか捨てるか私たちは選択に迫られる。モノが有れば記憶が生々しく思い出され苦しく、捨てることはその人が居ないことを認めるようで辛い。では残すことと捨てることの間解はないだろうか。  
かつてその人が確かに生きていた事実【所在】と、今その人がいないという事実【不在】の両方を許容する、その臨界点を住民自らが問いながら生きていける家を提案する。  
自分の一部だったその人が「いた」と「いない」との臨界点を探る家の提案である。

【家に内在する「誰か」】

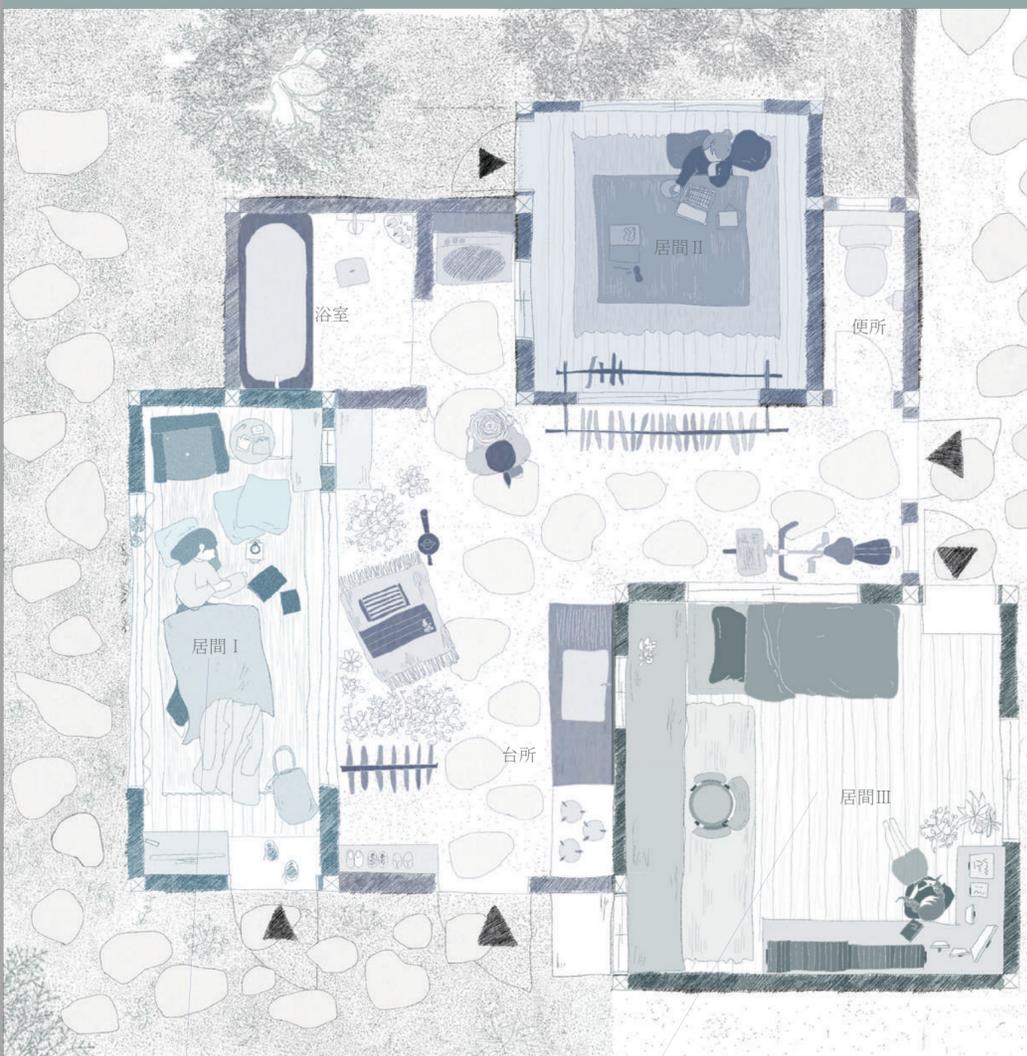


亡き母の部屋を伺う  
窓の手前の自分の服と、窓の向こう側の母の服と混ざり合って視界に入ってくる。確かにいた母の記憶を辿りながら父の音読を聞く。



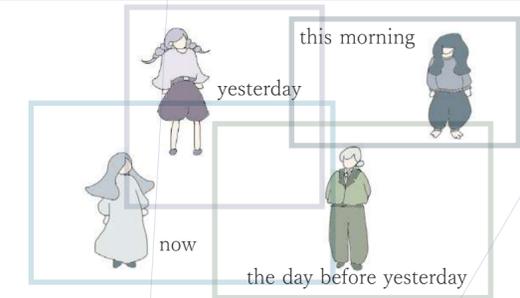
亡き妻の幻影を見る  
眠気眼に台所を伺う。窓枠に切り抜かれた家の中の風景は、フレームの中の絵のように亡き妻の幻影を見る。

## HOUSE:B 【不在の私と暮らす家】



家がモノに溢れば溢れるほど、記憶や感情は蓄積されてゆく、自分の望む家になっていく。  
しかしそれは裏を返すと、この家で私は私自身に埋没する事しかできない。  
住民は、心の病に陥った。  
その時、自分自身に包まれた「家」は突然、嫌悪や憎悪の存在になった。モノの存在が記憶を呼び起こし、そのモノ自体は好きなのに嫌悪感を感じる。あの時に戻れない事を通貫する。外に出られない住民は、自分を蓄積したこの家で自分のことを考えるしかない。許したいのに許せない、認めたいのに認められない裏腹の感情を上手く処理できないまま。  
もし昨日の自分が少し離れた所で暮らす隣人のように感じられる家なら、私自身でありながら私自身に埋没せず生きていけるのではないだろうか。昨日の自分と一步距離を置いた、過去の自分自身と今の自分の臨界点を探る家の提案である。

【私に内在する「私」】



窓に移る「私の家」と「外の世界」  
目を覚ますと窓から私の家が見える。外の風景と対照的に入ってくるその風景は、私の家を他人事のように感じさせる。



孤立する部屋  
溜まった洗濯物やまだ終わっていない仕事、眠る前までのことを忘却した目覚め。左右の対照的な陽射しと植物は時間だけを教えてくれる。